

# 佛蘭西書巡覧 7

平山 弓月

現代の歴史哲学者が正確に描き出したこの驚くべき国の人々は、アジアで唯一征服されなかった不敗の人々である。

「日本」(『百科全書』所収)



お約束どおり、今稿では『百科全書』の項目のひとつを読んでみましょう。今年は、日本とフランスが正式に外交関係を結んでから、ちょうど150年となる記念すべき年ですから、18世紀の後半に、フランスが日本をどのように理解していたかを、項目を通して考えて見ましょう。

「日本」*Japon*, 「日本人、日本の」*Japonois*(今の綴りでは*Japonais*)という語が入る項目は、10近くありますが、ここではディドロの最大の協力者であり、多くの項目を担当したルイ・ジョクール *Louis Jaucourt* (1704-79) が執筆した「日本」を中心にしましょう。

ジョクールは先ず、日本を「アジアの最も東に位置する大国」とし、日本の経済の基盤が米にあると述べ、生産量まで記しているのですが、その単位をmansとkokfsという語で表しています。これは「萬」「石」のことでしょうが、日本語での数字の読み方の習慣を知らずに書いたのでしょうか。しかし「萬」が「一萬石」の謂いであることは理解しています。その後、気候や暮らし、鉱物資源について触れ、国民性に筆は及びます。冒頭の記述はそこにあるものです。そして、「両者に共通する島国の誇りの高さ、北半球の両端にあって非常によく見られると思われる自死とで、何かイギリスと共通性がある」という説を引いています。

日本がヨーロッパで知られるようになった功績をマルコ・ポーロに与えていますが、彼の著述の不幸な歴史と、再発見者コロンブスの過誤を述べた後、ジョクールは日本とヨーロッパの初めての接触が、1542年に起きたポルトガル船の難破によるものであったとしています。この経緯は私たちも日本史で学んだ通りです。

一方でジョクールは日本の政体を詳しく述べています。しかしおそらくは天皇という存在が十分には理解し難かったようで、彼らにとっては既知である、回教徒たちのカリフ(教主兼国王)になぞらえています。未知のものを理解する場合の常套手段と言えましょう。日本の教主兼国王さらには教主兼女王が、ヨーロッパ紀元よりも660年も前から、連綿と続いていて、「この国では、女性は教主座から除外されてはいない」と付け加えています。かなり正確な知識を得ていたといわざるを得ません。

その後の日本の政体に関しても、*Taico* 太閤、*Dairi* 内裏、*Kubo* 公方などの語を用いて説明を試みます。若干不正確なところもありますが、参勤交代に関しても、「忠誠心の保証として、諸侯は妻子を首都にとどめさせられる」と記しているくだりなど、感心させられます。

そしてもちろん、キリスト教布教開始から禁教令の発布にいたる経緯にも、キリスト教徒への弾圧処刑をも含め、かなり詳しく触れています。やはり、キリスト教の布教は関心の深いことだったのでしょう。

ところで、このような日本に関する情報をどのようにして手に入れていたのでしょうか。それに関しては何も触れてはいませんが、ヨーロッパ世界にはすでにイエズス会の宣教師の報告書などで、かなり正確に日本の詳細が伝えられていたのです。

18世紀の後半の、『百科全書』が示した日本への関心を前に、さて日本はと考えると、フランスはもとよりヨーロッパ世界への関心は残念ながら皆無に近かったのではないのでしょうか。私たちはこれを教訓として受け止めるべきでしょう。

ひらやま ゆづき (教授・フランス語・フランス文化論)